

経済開発の中での食料の生産と消費におけるジェンダ-関係の変動(第2報)  
 統計にみるわが国の食料の生産と消費プロセスにおけるジェンダ-関係の変動  
 昭和女大(院) 梶 謡子 昭和女大・女文研 ○伊藤セツ

目的：女性と食料の関わりは、生産・消費の両過程において男性より深いと考えられている。経済開発に伴って、農業から食品加工業、また食料に関する流通やサービス業が盛んになると、女性と食料の関わりはどうかを、男女就業率や家事時間の対比によって検討し、家政学・生活科学に、WID及びジェンダ-視点を導入する手がかりとしたい。

方法：わが国の「国勢調査」を用い、産業別・職業別細分類から、食に関連する項目を拾いだし、1920年から1990年まで70年間の男女別就業の推移を時系列的に追ひ、さらに、従業上の地位の男女差を組み合わせて、食の生産、流通、消費に関わる職業労働のジェンダ-関係の特徴をみる。非職業的関わりについては、「国民生活時間調査」の家事労働時間の男女差とその推移を見、それらを総合して上記目的に迫る。

結果：「国勢調査」の産業分類を時系列的にみれば、農業に携わる女性比は、総計では、この70年間に、5割前後とそれほどの変化はないが、男性優位であった農業サービス業、漁業、特に、水産養殖業では女性の割合の上昇が認められる。食料品、清涼飲料製造業では、女性の比率はこの間に増大し、1990年では男性を上回る。食料飲料の卸売・小売業に関しては最近20年間の統計しか得られないが、卸売では3割弱が、小売では6割が女性によって担われている。飲食店は女性の比率が漸減して1990年で6割弱、食を扱うと思われる家事サービス業は一貫して9割以上が女性である。これに、職業別細分類、従業上の地位別、家事時間別の特徴を加味することによって、わが国の女性の食との関わりの特徴の一端が明確になり、食の世界の性別職務分離や役割分担の固定が浮き彫りにされた。